

最優秀賞論文

女性同(両)性愛者のコミュニティ参加は 精神的健康・自尊心にどのような影響を及ぼすか

— 面接法と質問紙調査法による検討 —

三 宮 愛

要 約

本研究の目的は、女性同(両)性愛者のコミュニティ参加が自尊心と精神的健康に及ぼす影響を検討することである。特に、同(両)性愛者のコミュニティに関して、大規模で短期的な「イベント」と、小規模で中長期的な「友人グループ」に分け、それぞれのコミュニティに参加する心理的意味を精査した上で、短期的な心理状態の指標である「精神的健康」と長期的な心理状態の指標である「自尊心」に及ぼす影響を調べた。

研究1では、女性同(両)性愛者の当事者が抱える問題とコミュニティ参加の捉え方について面接法を用いて調査した。その結果、性的指向の自覚と葛藤は思春期に起こり、性的指向を確立させた後にカミングアウトするという過程を辿っていた。また、イベントには性的指向を確立した者が参加し、特に外向的な者が満足しやすい可能性が示唆された。

研究2では、研究1の知見に基づき、(1) コミュニティ参加の心理的意味、(2) それらが精神的健康や自尊心に及ぼす影響、(3) 外向性との関連性、について質問紙法を用いて調査した。結果は以下のとおりであった。はじめに、イベント参加には“価値観変化”、“娯楽”、“関係形成”、友人グループ参加には“価値観肯定的変化”、“日常満足”、“関係発展”の心理的意味があることが示された。また、女性同(両)性愛者はこれらの心理的意味を非常に重要視していた。加えて、イベントやバーでの“関係形成”が自尊心を向上させ、友人関係による“日常満足”が精神的

健康と自尊心のどちらも高めていた。この結果は、日常場面で性的指向を明示することのない女性同(両)性愛者が、同(両)性愛者コミュニティにおいては自然体で関係を形成することが可能となり、「自分と同じ人はたくさんいること」を意識した結果、精神的健康・自尊心共に良い影響を与えているものと解釈できる。さらに、10代の対象者のみ、イベントやバーでの“価値観変化”が精神的健康を促進していた。この結果から、アイデンティティ未確立の女性同(両)性愛者が思春期に性的指向に葛藤した際、同じ性的指向を持つ者との関わりの機会が重要になることが示唆された。このことは、同世代の男性同(両)性愛者にも該当すると考えられるため、今後の同性愛者支援に向けて、多様な性のあり方に触れる機会を学校教育場面で設ける事が必要であろう。

1. 問題と目的

1-1. LGBとは

レズビアン (Lesbian)、ゲイ (Gay)、バイセクシュアル (Bisexual) (以下LGB) の人々は一般に性的マイノリティと呼ばれ、様々な身体的・心理的問題を抱えている。性的マイノリティの問題を扱う際、しばしばトランスセクシュアル (Transsexual: 性同一性障害) も纏めてLGBTとして論じられがちである。しかしLGBが「性的指向 (異性・同性のどちらを恋愛対象とするか)」を表すのに対し、トランスセクシュアルは「性 (身体の生物学的な性)」と「性自認 (自身の性に対する本人の認識)」に関するものであることから、本研究ではLGBのみを対象とする。人口に占めるLGBの割合に関して、世界規模で女性のおよそ2% (1200万)、男性のおよそ4% (2400万人) が完全な同性愛者として生きているという報告 (Mackay, 2000) もあり、決して無視できる数ではない。このことから、同(両)性愛者の心理的諸問題や心理的支援の検討は、決して小さなテーマではないと言える。しかし、本邦の当該分野についての研究はまだまだ発展途上段階であり、量・質両面での乏しさが窺えるのが現状である。

LGBの抱える心理的諸問題の多くは自身の性的指向に起因するところが大

きく、LGB であるという自覚と葛藤が主な原因である。その結果、自尊心の低下による抑鬱状態や、精神的健康の悪化による自傷行為や自殺（自殺未遂）、「同(両)性愛を治療してほしい」という訴え、不特定多数との性交渉に伴う性感染症などの様々な問題行動があらわれる。また、周囲の人々からの影響もあり、Herek & Capitanio (1996) によれば異性愛者の LGB に対する否定的な態度の存在が挙げられている。LGB が自らの性的指向をカミングアウトすることは、異性愛者の差別や偏見などを引き起こし、社会的不利益を受けることに繋がり、これも心理的問題の原因となり得る。

1-2. LGB の自覚と発達過程

ゲイ・バイセクシュアル男性を対象とした日高・市川・木原 (2004) の研究によれば、「男性に性的魅力を初めて感じたとき」は平均年齢11.5歳、「自分は異性愛者ではないかもしれないと考えたとき」は平均年齢14.1歳、「ゲイであることをはっきりと自覚したとき」は平均年齢16.4歳であり、性的指向の自覚は思春期の時期に集中しているのが分かる。この自覚の段階的変化に関しては、石丸 (2001) の提案する「同性愛アイデンティティの発達過程」において、①同性愛に嫌悪感を持つ時期、②同性愛と異性愛のどちらに価値を置くか混乱し揺れ動く時期を経て、③同性愛・異性愛ともに安定した価値付けができ同性愛が自己に上手く統合された時期を迎えるとされている。①の時期には社会通念としての同(両)性愛に対する偏見を自己に投影した様相を見せるが、②、③の発達段階を辿るには LGB に対する知識や理解を深め、LGB の人間関係を発展させることが必要不可欠である。つまり、思春期を迎え、自らの性的指向を自覚し葛藤した際は、他の LGB との交流をもち、同(両)性愛に対してポジティブな認識を確立することが精神的健康及び自尊心の維持・促進に有用であることが想定される。

以上のことから、同(両)性愛者であるという性自認はアイデンティティ確立及び自尊心に多大な影響を及ぼすことが立証されている。同(両)性愛とアイデンティティがうまく結び付けられない状況では低自尊心状態からくる精神的健

康への悪影響がみられ、これが抑鬱や前述の「同性愛を治療したい」との訴えに及ぶ。同(両)性愛者を支援するには、こうした状況を改善して、同(両)性愛者の精神的健康や自尊心を向上させることが必要不可欠なのである。

1-3. 同(両)性愛者コミュニティが自尊心に及ぼす影響

同(両)性愛者コミュニティが自尊心に及ぼす影響は、他者からの受容感という観点から研究されている(石丸, 2004)。石丸は、マイノリティの自尊心が低くない理由として自尊心防御的特性(Crocker & Major, 1989)を例に挙げている。これはスティグマをもつ者が自尊心を守るために用いる3つの方略で、偏見帰属、選択的価値付け、内集団比較から構成されている。まず、偏見帰属は自身へのネガティブな評価を外集団の偏見ある態度に帰属させることである。LGBの場合、LGBであるがゆえの全般的な困難の原因を同(両)性愛に対する異性愛者の差別・偏見に求めることで、自尊心を守ることにあたる。次に、選択的価値付けは、劣っている面の価値を切り下げ、優れている面を重んじることである。例えば、LGBの場合では、同性婚制度が存在しないことから婚姻関係そのものよりもパートナーとの精神的な繋がりを重視することがこれに当たる。最後に、内集団比較は、有利なマジョリティと自身を比較するのではなく同じ不利を共有している内集団において社会的比較をすることである。LGBで言えば、自身の社会的地位やパートナーとの関係を考える際に、異性愛者と比べずに他のLGBと比べるというものである。社会的比較を行う際にはマイノリティとしての社会的ネットワークをもつことが必要不可欠であり、LGBの場合も同(両)性愛者コミュニティへの参加がこれにあたる。しかし、この石丸の研究では、同(両)性愛者ネットワークは自尊心に直接の影響を持っておらず、偏見帰属を介した間接効果のみが見られた。つまり、同(両)性愛者ネットワークを持つこと、それ自体が自尊心に及ぼす影響はほとんどみられなかったのである。しかし、この研究では同(両)性愛者ネットワークを、「セクシュアリティのことを率直に語る同じマイノリティの友人がいる」、「性的マイノリティのグループや団体に定期的に通っている」、「レズビアン・ゲイ・

バイセクシュアルの友達がとても少ない」の3項目で質問しており、同(両)性愛者ネットワークを持つか否かにのみ焦点を当てている。同(両)性愛者ネットワークの心理的意味は複数あることが想定され、それぞれの心理的意味が自尊心に異なる影響を与えることも考えられる。また、同(両)性愛者ネットワークは友人関係・大きなグループとの関わりを包含した概念であることから、コミュニティごとに違う心理的意味を持つ場合に対応していないことも問題であろう。

また、異性愛者を装うことによるストレスを強く感じているゲイ男性ほど、抑鬱・特性不安・孤独感が高く、自尊心が低くなる(日高, 2000)。しかし、同(両)性愛コミュニティのなかでは異性愛者役割葛藤を感じずにすむため、精神的健康に対してプラスに作用することが考えられる。

LGBに自身の性的指向を意識した出来事の記録をさせた研究(Ishimaru, 2002)では、「異性愛者を装った」などの悪い出来事の記述が26.1%あった一方で、「同性愛を共通点として仲良くなれた」など、LGB同士の交流に関して良い出来事の記述も35.6%見られたとしている。桐原・坂西(2003)による、レズビアン・バイセクシュアル男女を対象にした、カミングアウトの実態調査では、同(両)性愛者コミュニティへの参加は「生活が楽しくなった」など全体的にポジティブな変化をもたらすが、コミュニティに否定的イメージをもつ者もいた。以上のように、LGB同士のコミュニティはLGBの心理的側面に多大な影響を及ぼしており、当事者も生活の一部として、こうした交流を重要視している可能性が考えられる。

1-4. LGBの中の女性

一連のLGBに関する研究は、日高(2000)、日高ら(2004)が男性同(両)性愛者のみを、また石丸(2001, 2002, 2004)はLGBを対象としていることから、LGBの中でも女性同(両)性愛者のみに焦点をあてたものは非常に少ない。

数少ない女性同(両)性愛者についての研究の一つとして注目されるのは、石井(2009)の女性同性愛者が抱える生活上の問題と対応に関する研究である。

この研究は、女性同性愛当事者を対象にして面接を実施したものである。具体的には、性的マイノリティのパレードに参加した際の女性同性愛者の語りから、対象者が性的マイノリティの集まるコミュニティに参加して自己の性的指向を肯定的に受け止められるようになったことが示唆されている。石井によれば、性的マイノリティが集まるバーやクラブのある地域は大都市圏に限られており、地方で暮らす人々が気軽に参加できる場所ではないが、インターネットの普及により、サイトで仲間を見つける事が容易になっているという。これは、わずかな紙媒体（雑誌・書籍）などを頼りに仲間探しに奔走し、医学書などの同性愛の項目をひいて落胆し、悩みを抱えざるをえなかった頃からすると大きな変化と言える。

女性同(両)性愛者は、その当事者が“女性”であることから性的欲求を社会的に抑圧されていると想定できる。また、その中で親密な対人関係を求める気持ちも強くなるだろう。杉浦（2009）によれば、そもそも女性の同性愛的欲求は認知されにくい。社会背景として女性の性的欲求それ自体が認知されにくく、男性同(両)性愛者に比べて抑圧された状況が考えられる。加えて、女性は男性に比べて親密な友人関係を志向しており、深い自己開示を行い、愛着を形成し、お互いを援助しあう。そのため、LGBの中でも、男性同(両)性愛者に比べて、日常生活での性的指向の開示が困難な女性同(両)性愛者は同(両)性愛者コミュニティへの参加がより一層重要になると思われる。

以上のことから、女性同(両)性愛者が自らと同じ性的指向をもつ者の集まるコミュニティに参加することは、自らの性的指向を肯定的に捉え、同性愛アイデンティティを確立する上でポジティブな影響をもつことが考えられる。

本研究の目的は、日本における女性同(両)性愛者の同(両)性愛者コミュニティへの参加が精神的健康、及び自尊心へ及ぼす影響を調査することである。コミュニティ参加が心理状態に及ぼす影響を正確にとらえるため、短期的な状態変化を伴う精神的健康と、中長期に渡って形成される自尊心の2つを指標とする。これにより、同(両)性愛コミュニティ参加の一時的な影響と、その後の人生全体に対する大きな影響の両方を検討する。研究1では、女性同(両)性愛

者の抱える問題とコミュニティ参加について探索的に検討するため、当事者に半構造化面接を行って、質的に調査することを目的とする。その結果を踏まえ、研究2では、同(両)性愛コミュニティに参加することの多様な心理的意味や、それらが精神的健康と自尊心に及ぼす影響について、より多数の当事者に質問紙調査し、実証的に検討することを目的とする。

2. 研究1・面接法による質的研究

2-1. 方法

面接日・場所 面接は、別々の日に一人ずつ行った。また、プライベートな内容を含むため、他者の目を気にする必要のない、話しやすい環境である、カラオケBOXを面接の場所として選択した。

面接参加者 関西地方に在住の同(両)性愛者の女性2名を対象とした。この2名は、関西の女性同(両)性愛者の集まるイベントやバーで筆者が知り合った人物であった。年齢は、2名とも20代前半であった。

面接方法 筆者が面接者となり、半構造化面接法によって聞き取り調査を行った。面接者があらかじめ用意した項目に沿って順番に質問し、自由に回答するよう求めた。回答時間に制限は設けず、回答は参加者の許可を得た上でICレコーダーに録音した。また倫理面の配慮として、答えにくい・答えたくないと思う内容に対しては拒否してもかまわないことを教示した。得られた内容に関する学術的な使用範囲について説明し、論文での使用許可を求め、さし障りのあると判断した内容については公開しないことも教示した。また使用の際、個人が特定されない形をとることを約束した。回答時間は1人60分程度であった。

質問項目 質問項目は「同性に魅かれる事に気付いた時期・きっかけ」、「友人・家族・恋人・職場へのカミングアウトの有無」、「同(両)性愛者として抱える問題・悩み」、「女性同(両)性愛者のコミュニティ」の4項目であった。問題・悩みの項目では「女性同(両)性愛者としての問題」と、「同(両)性愛者としての問題」を区別して聞き取りを行った。

参加者のプロフィール 以下に面接参加者のプロフィールを記述する。

Aさんは20代前半の会社員である。同性友人と同居しており、自身を両性愛者と自認している。女性同(両)性愛者のイベント・バー・LGBTの地位向上のためのパレード・女性同(両)性愛者向けSNSなど様々なコミュニティに積極的に参加している。明るく活発で女性同(両)性愛者の友人も多く、コミュニティの中心的立場に立つこともしばしばである。

Bさんは20代前半の大学生である。実家で家族と同居しており、自身を同性愛者と自認している。中高大と女子校ですごし、音楽系の部活に所属してきた。将来は教育関係の職に就くことを目指している。女性同(両)性愛者向けのイベントには数回参加し、バーにも通ったが、現在は多忙のためにどちらも行っていない。

2-2. 結果と考察

同性に魅かれる事に気付いた時期・きっかけ Aさん：小学校の頃から女の子に目がいったし、友達も女の子ばかりだった。今思えばそれが魅かれるってことだったのかもしれない。恋愛感情だと思ったのは高校二年生で、初めて女の子と付き合い合った時であった。

Bさん：小学校の三年生か四年生、女友達から“好きな男の子”の話を聞いてすごく嫌だった。恋愛感情とは分からず、仲のいい友達に自分より大切な存在ができるのが嫌なのだと思っていた。はっきり同性愛者と気付いたのはかなり遅く、高校三年生であった。なんとなく自分は女の子が好きだとは分かっていたが、認めたくなかったのかもしれない。

以上から分かるように、Aさん、Bさん共に過去を振り返るとまず小学生の頃の思い出を語っていた。性的指向を確立するのは共に高校生の頃であり、思春期のアイデンティティ確立と性的指向の自認が深く関わっていることが伺える。

自身の性的指向について、Aさんは「異性と付き合いことはあるが、心の底から好きと思ったことはない」と語る一方で、「でも今後どうなるか分か

らない」という理由から、両性愛者と自認していた。Bさんは同じく「男性を好きになりたくて短期間付き合ったこともあるが、恋愛対象ではなかった。身体の関係を求められたときにははっきり拒んだ」と語り、同性愛者と自認していた。女性同(両)性愛者は①同性愛に嫌悪感を持つ時期から、②同性愛と異性愛のどちらに価値を置くか混乱し揺れ動く時期にかけて、異性を恋愛対象にしようとして交際・性交渉などを試みることがあることがわかった。Aさん・Bさん共にこれを経て性的指向を確立させていた。

カミングアウトの有無 カミングアウトとは、自身の性的指向について他者に開示する事である。本研究ではカミングアウトの対象を友人、家族、恋人及び恋愛対象者、職場の4群に分け、それぞれについて聞き取りを行った。

友人へのカミングアウト Aさん：最初は友人にSNSの日記を通してカミングアウトを行った。その時に否定的な反応は全くなかったことからオープンになった。ちょうど20歳で自分の発言や活動にも責任が持てるし、自分が隠しているのに世の中が変わってほしいというのはおかしいと思った。

Bさん：友人に初めてカミングアウトしたのは大学1年生の春であった。それまでも女子校で同性愛者に会っても不思議ではなかったが、いなかった。周りに偏見のなさそうな人も見つけられず辛かった。大学1年生の同じクラスの同性愛者の子の話を偶然聞き、仲良くなった。両性愛者を含めてクラスに4人いて本当にびっくりした。それまでは内向的で「自分は人とは違う」と劣等感があったが、友人に影響されオープンになった。部活の先輩にも同性愛者がいて、友人にカミングアウトした後、先輩にも話した。

カミングアウトについてAさん、Bさんに共通して言えるのが、どちらも初めて開示した対象が友人であるという点、また最初のカミングアウトが成功したことによってそれ以降のカミングアウトが促進されたという点である。これはカミングアウト経験者に最初の開示対象者を調べたD'Augelli & Hershberger (1993)の研究の結果と一致していた。これによると、73%が友人、7%が母親、1%が父親を最初の開示対象としていた。つまり、LGBの多くが、最初のカミングアウトの相手として友人を選ぶのである。開示対象者

のフィードバックはその後のカミングアウトの遂行に影響を及ぼすだけでなく、最初のカミングアウト時期が思春期に集中することから、同(両)性愛者のアイデンティティ・自尊心の形成と維持に多大な影響を及ぼすものと思われる。

家族へのカミングアウト Aさん：みんなそうだと思うけど、緊張するのは家族にカミングアウトしたときだった。家族に対してはパレードの実行委員をするときに言った。最初はびっくりしていたが、パレードの趣旨を説明したら大丈夫だった。先日母に「色々あると思うけどあんたの味方だから」と言われた。

Bさん：家族にカミングアウトはしていない。はっきりとは言っていないが母と姉は同性愛に対して偏見がなく、多分気付いている。父はよく分からないが知らないふりをしていたいのかも。母からは、「結婚が全てだとは思わないから好きにしろ」と言われた。父は理解できないと思うので、一生言わないと思う。悲しむだろうし、同性愛のことをカミングアウトしないからと言って父を裏切っているとは思わない。

Aさんの「みんなそうだと思うけど」という言葉から分かるように、同(両)性愛者にとって最初のカミングアウトと同等かそれ以上に躊躇するのが、家族へのカミングアウトである。友人に対してカミングアウトしていても家族にはしていない、という人もいる。これはカミングアウトした場合の家族の拒絶反応からの心理的ショック、そこから発生しうる経済的・社会的な不利益を憂慮するだけでなく、Bさんのように年配の親に心配をかけたくない、悲しませたくないという配慮からくることも多い。

恋人及び恋愛対象者へのカミングアウト Aさん：好きになった人に対しては両性愛者とは言わず、「友達としてじゃなく好き」と言うだけになっている。

Bさん：中学生の頃に好きになった人は、異性愛者で彼氏もいたから、カミングアウトも告白もしなかった。高校の頃に好きになった人は異性愛者で、カミングアウトはしていないが、お互い自然と友達以上の感情になった。その後の恋人は、お互い同性愛者だと元々分かっている人である。

恋愛対象者へのカミングアウトについては慎重な様子が語られると思われたが、必ずしもその限りでなかった。思春期の同(両)性愛者コミュニティに属さない状態であれば、異性愛者の友人を恋愛対象とし、カミングアウトに躊躇する場面が想定される。しかし、同(両)性愛者コミュニティに属し、自身と同じ同(両)性愛者と出会う場面が増えることで、既に同(両)性愛者と分かっている状態から関係構築が始まるため、カミングアウトの必要がないものと考えられる。

職場へのカミングアウト Bさん：職場でのカミングアウトは出来ないと思う。堅い業種だし、子どもへの影響や親の目を考えると出せない。“同性愛者＝変な人・偏っている”と思われそう。その影響で自分の仕事の評価が左右されるのは避けたい。もっと違う、芸術系の仕事だったら言えるかもしれない。

職場でのカミングアウトの困難さの程度は、Bさんの語りにあるように、業種・職種によって異なるであろう。しかし職場で自身の性的指向について開示しているLGBは少ない。これは、性自認についての開示を行うトランスセクシュアルのカミングアウトに対し、LGBのカミングアウトは性的指向についての開示のため、職場生活を送る上での開示の必要性が薄いと感じられるからであろう。トランスセクシュアルであれば、異性装や通名の許可、トイレの使用など、開示せざるを得ない様々な場面が想定されるが、LGBではそういった状況が少ない。しかし同僚・上司との恋愛話場面（異性の紹介や見合い、「結婚しないの？」等の問い）ではストレス状況が発生し得るが、それでもBさんのように自身の仕事での評価や職場の人間関係への影響を考慮して、カミングアウトを避ける場合が多いものと思われる。

同(両)性愛者として抱える問題・悩み

女性同(両)性愛者として抱える問題・悩み Aさん：女性同性愛者としては(悩みは)ない。他の人からよく聞くのが、30～40代で結婚していないと「一人独身の女性」という見方をされ、お見合いの話を持ってこられるということである。自分は20代だからそういう悩みはない。

Bさん：男性同性愛者と違う部分の悩みは、性行為の際の一体感が薄いこと

である。SEX という感じがせず、スキンシップとの境目がはっきりしないのがもどかしい。女性との性行為は数に入らないのではないかと不安になる。経済的弱さから、恋人を男性に取られるのではないかと不安になる。

語りでは、性行為の結びつきと経済面の弱さが表れた。これらの点は、確かに性器の挿入を伴う性行為を行い、経済的なハンディを負う可能性の低い、男性同(両)性愛者であれば抱えにくい悩みである。Bさんはこの二つから「男性に取られる」という表現で、パートナーを失うことに対する不安を語った。

同(両)性愛者として抱える問題・悩み Aさん：小さい問題はあるが、あまり悩まない。初対面の人との恋愛話では面倒なので(両性愛者であると)言わない。結婚願望はなく、制度としての結婚に興味がないから外国に行ってしまうとは思わない。子どもも欲しいとは思わない。同性婚賛成の署名はするが、選択肢が増えれば良いと思うくらい。

Bさん：老いてから子どもがいらないのはどんな感じかなと思うが、漠然としている。紙に判を押して安心を得るだけだと思つたため、昔から結婚願望はない。海外で同性婚をする人に対しては「自由な時代になってよかったな」と思う。仲間意識から同性婚賛成の署名はする。子どもを産みたいとは思わないが、好きな人に産んでほしいと思う。

30代女性を対象とした石井(2009)の研究では現状と将来に対する漠然とした不安や墓の問題、子どもを持つことへの希望と諦念が見られたが、本研究では面接対象者が20代前半であることから、曖昧であった。自尊心防御的特性の選択的価値付けに基づいて結婚・出産の価値を切り下げる一方、結婚することなくパートナーと一緒にいる事を重んじる同(両)性愛者特有の価値観が窺える。

女性同(両)性愛者のコミュニティ Aさん：ネット上でオフ会を知り、20歳以上向けばかりだったので、自分で10代向けを幹事として企画した。それが初めての参加だった。

オフ会とは、インターネット上で知り合った特定の趣味嗜好を持つ者が3人以上集まって会うことである。インターネット上を“オンライン”と呼ぶこと

から、実生活を指して“オフ”と呼び、サブカルチャー愛好者や芸能人のファン同士など様々な層で行われている。同(両)性愛者間でも頻繁にこのオフ会が行われており、実生活では見つけにくい自分以外の同(両)性愛者と出会うことで、友人や恋人を作る手段の一つとされている。規模としては3人から数十人までで、食事をするだけのものから小規模のイベントを開催する場合もある。インターネットがなく紙媒体のみに頼らざるを得なかった時代に比べると、同(両)性愛者同士の出会いは遥かに容易なものになっていると言える。こうしたインターネット上の情報を契機とした経験は、次のBさんの語りからも得られた。

Bさん：バーに3～4回行ったことがある。行った理由は友達作りのためだった。20歳になった時にネットで、バーの出会いイベントを見つけた。バーの存在自体は中3の頃にネットで知った。

大都市圏では、女性同(両)性愛者（もしくは同(両)性愛理解者も含む場合もある）のみを対象としたバーがある。これはオフ会と同程度の規模だが、不定期で行われるオフ会とは違い、曜日時間を決めて営業していることから、「いつでもそこに行けば仲間に会える」という感覚がある。しかし同(両)性愛者向けと大々的に看板を出しているわけではないため、バーを知るためには同(両)性愛者の友人からの紹介やインターネット上の口コミに頼る必要があり、一切繋がりを持たずインターネットも利用できる環境にない同(両)性愛者にはバーの存在を知ることは難しい。

Aさん：20歳の頃に、付き合っていた人に連れられて、クラブイベントに行った。「夜の世界」「みんなギラついててアホみたい」と、違和感があった。その後誘われると行くようになり、理解度が上がった。今、自分が行く理由は普段会えない友達と会うためだ。イベントに行って、いろんな人と出会い、何事にも寛容になったのが一番大きな変化だと思う。

Bさん：内向的で知らない人と話すのは苦手なため、クラブイベントには馴染めない。軽いノリで踊れる人には向いているが、自分には人が多すぎて疲れる。イベントに行く人は社交的な人だと思う。クラブイベントは周りに仲間が

いない人にとって必要だと思う。

Aさん：イベントに来る人は“一步踏み出している人”だと思う。イベントを知っていても来ることのできない人もいるだろうし、存在自体知らない人もいる。だから、来ている人はある意味幸せだといつも感じる。知らずに悩む子もいるだろうと思う。“一步踏み出している人”というのは性的指向に気づいて、認めて、肯定している人だからだ。「自分はこれでいいや」と思えたからイベントに来るのだろうし、「自分はおかしい」と思っていたら来にくいと思う。

オフ会やバーより大規模なものとして、同(両)性愛者向けのイベントが挙げられる。LGB全般を対象としたものもあるが、ここで得られた語りは女性同(両)性愛者のみを対象としたクラブイベントやパーティである。イベントは数十人から数百人の参加者が集まる。主にインターネット上やバー、他のイベントでの告知、女性同(両)性愛者間の口コミによって集客されている。

こうしたイベント等の同(両)性愛者コミュニティでの関係形成、同(両)性愛についての理解促進は前述の「同性愛者アイデンティティの発達過程」(石丸, 2001)において自尊心の維持・形成に不可欠であるとされている。しかし、Aさんの語りにあるように、そもそも自尊心がある程度高く、同性愛アイデンティティが確立されていないと、同(両)性愛者の集まる場に来ることは難しいと考えられる。またBさんの語りからは、特にクラブイベント等の大規模コミュニティの場合、外向的な人でないと参加した際の満足度の高さや、同(両)性愛者同士の関係構築に繋がりにくいことが考えられる。

2-3. まとめ

面接で語られた内容のうち重要な結果について3点述べる。まず1点目は、先行研究と同じく面接参加者2名共に性的指向の確立が思春期に起こっていることである。この頃に2名とも異性を恋愛対象にしようと交際を試みており、これは同性愛と異性愛どちらに価値づけをするか揺れ動く時期とも一致する。この揺れ動く時期を経てBさんは自身を同性愛者であるとしていた。思春期

におけるアイデンティティ確立に自身の性的指向への気づきが多大な影響を及ぼしているのは明らかである。2点目はカミングアウトによる影響である。思春期の揺れ動く時期の後、自己に対し同(両)性愛が統合された頃にカミングアウトすると考えられるが、その際の対象者の肯定的な反応が2回目以降のカミングアウト、ひいてはその後の精神的健康の向上や自尊心の維持に影響を及ぼすものと思われる。3点目は、同(両)性愛者向けのイベントやバーについての2名の語りである。精神的健康や自尊心にプラスの影響を及ぼすと考えられるこれらのコミュニティであるが、同(両)性愛について肯定的でないに参加すること自体が困難な場合が想定された。また、性格が外向的であったり、精神状態が良好であったり、自尊心が高くないとこれらのコミュニティに対し満足感を抱いたり、同(両)性愛者同士の関係性を築くことが難しくなるため、コミュニティからのプラスの影響を受けにくい可能性がうかがえた。

3. 研究2・質問紙調査による量的研究

研究2では、女性同(両)性愛者コミュニティを女性(両)同性愛者向けのクラブイベントやバーなどの大規模・一時的集団と、女性同(両)性愛者同士の3人以上の友人グループという小規模・中長期的集団に分けた上で、各コミュニティの心理的影響の構造を明らかにする。

石丸(2004)の研究では、同性愛者ネットワークから自尊心への影響は見られなかったが、「同性愛者ネットワークを持っているか否か」に焦点が当てられていた。それに対し本研究では「同(両)性愛者コミュニティ内でどう感じているか」、「同(両)性愛者コミュニティからどのような影響を受けているか」といったコミュニティの心理的意味を精査した上で、精神的健康及び自尊心への影響を調査する。

3-2. 方法

調査対象者と実施方法 大阪府で開催された関西レインボーパレード2012の女性参加者に質問紙を配布し、回答を依頼した。関西レインボーパレードは

2006年から行われている屋外型のイベントであり、様々な性別・性的指向・性自認のあり方についての理解を求めるものである。回答のあった89名のうち、異性愛者と回答した者と、自身の性別をトランスジェンダーと回答した者とを除外した。その結果、女性同(両)性愛者66名を有効回答とした。平均年齢は25.3歳 ($SD=7.7$) であり、最低年齢は15歳、最高年齢は53歳であった。

質問項目 質問項目は以下のとおりである。

年齢及び性自認、性的指向 年齢は数字を記入するよう求めた。また、本研究は女性同(両)性愛者性を対象にしたものであることから、性自認については「1. 女性」、「2. トランスジェンダー (FtX、FtM)」とし、どちらか一つに回答するよう求めた。性的指向については、「1. 女性」、「2. 男性」、「3. トランスジェンダー」、「4. その他」とし、複数回答可とした。

女性同(両)性愛者コミュニティ (イベントやバー) についての質問項目 女性同(両)性愛者向けのイベントやバーへの参加度について、「1. 参加したことがない」から「4. 頻繁に参加している」の4件法とした。研究1で得た知見をもとに、女性同(両)性愛者向けのイベントやバーへの参加の心理的意味に関する15項目 (Table 1) を、「1. 全く思わない」から「5. とても思う」まで

Table 1 イベントやバーに関する質問項目

社交的な気持ちになれる
同(両)性愛の悩みを共有できる
日常から離れられる
自分に自信が持てるようになる
イベントやバーは閉鎖的である
同(両)性愛者の恋人ができる
生き方について新しい考え方に触れられる
同(両)性愛者はマイノリティだと実感する
同(両)性愛者の友人に会える
同性愛の悩みに対しアドバイスを貰える
恋愛観について新しい考えに触れられる
同(両)性愛に対する偏見がなくなる
日常生活が楽しくなる
ストレスの解消になる

の5件法で回答を求めた。

女性同(両)性愛者の友人グループ（3人以上）についての質問項目 女性同(両)性愛者向けの友人グループへの参加度について、「1. 参加したことがない」から「4. 頻繁に参加している」の4件法とした。同(両)性愛者向けのイベントやバーへの参加の心理的意味と同様の15項目（Table 2）を、「1. 全く思わない」から「5. とても思う」までの5件法で回答を求めた。

精神健康尺度（GHQ） 精神健康尺度は、調査回答者の調査前数週間の精神健康状態を評価するための尺度で、Goldberg（1972）によって作成された項目を中杉（1981）が邦訳したものである。12項目について4件法で回答を求めた。1例として、「何かをする時いつもより集中して」という問いに対し、「1. できた」、「2. いつもと変わらなかった」、「3. できなかった」、「4. 全くできなかった」のいずれかから選択するため、値が大きくなるほど精神健康状態は悪いものとなる。その他の質問項目として、「心配事があってよく眠れないような事は」、「いつもより自分のしていることに生きがいを感じる事は（逆転項目）」等があり、これに対しては「1. まったくなかった」、「2. あまりなかった」、「3. あった」、「4. たびたびあった」から回答を求めた。

Table 2 友人グループに関する質問項目

社交的な気持ちになれる
同(両)性愛の悩みを共有できる
日常から離れられる
自分に自信が持てるようになる
友達グループは閉鎖的である
同(両)性愛者の恋人ができる
生き方について新しい考え方に触れられる
同(両)性愛者はマイノリティだと実感する
同(両)性愛者の友人に会える
同性愛の悩みに対しアドバイスを貰える
恋愛観について新しい考えに触れられる
同(両)性愛に対する偏見がなくなる
日常生活が楽しくなる
ストレスの解消になる

自尊感情尺度 自尊感情尺度は、人が自分自身の能力や価値についても評価的な感情を測定する尺度である。もとは Rosenberg (1965) によって作成された項目を山本・松井・山成 (1982) が邦訳したものである。「少なくとも人並みには、価値のある人間である」、「いろいろな良い資質をもっている」、「敗北者だと思ふことがよくある (逆転項目)」等の自尊感情を表す10項目について、「1. あてはまらない」から「5. あてはまる」の5件法で回答を求めた。

外向性尺度 性格特性について外向性、情緒不安定性、開放性、誠実性、調和性の5因子で測定する Big Five 尺度 (和田, 1996) のうち、外向性のみを使用した。これは10項目からなる尺度で、「話し好き」、「陽気な」、「無口な (逆転項目)」等の外向性を表す性格特性用語に対し「1. 全くあてはまらない」から「7. 非常にあてはまる」の7件法で回答を求めた。

3-3. 結果

各尺度の因子分析

女性同(両)性愛者向けイベント 女性同(両)性愛者がイベントやバーに参加することで、どのような心理的影響を受けているのかを調べるため、女性同(両)性愛者向けイベントに関する15項目について因子分析を行った。因子負荷量が低い項目及び2因子以上に負荷している、7項目を除外した上で、固有値1以上であること及び理論的背景から3因子を抽出し、主因子法、Promax 回転による因子分析を再度試みた。その結果、3因子構造8項目となった。第1因子は「生き方について新しい考え方に触れられる」や「恋愛観について新しい考え方に触れられる」といった項目から構成されていたため“イベント参加による価値観変化”因子と命名した。また、第2因子は「ストレスの解消になる」や「日常生活が楽しくなる」といった項目から構成されていたため“イベント参加による娯楽”因子と命名した。第3因子は「同(両)性愛者の恋人ができる」や「同(両)性愛の悩みを共有できる」といった項目から構成されていたため“イベント参加による関係形成”因子と命名した。因子ごとに α 係数を算出し、ある程度の信頼性を確認できたため、各因子に負荷した項目の平均値を

算出して、続く分析に用いた。各因子の項目や項目ごとの因子負荷量、信頼性係数については Table 3 に示した。イベント参加の心理的影響を検討するため、因子ごとに理論的平均値の 3 を上回るかについて、1 サンプルの t 検定を実施した。その結果、イベント参加による価値観変化 ($t(65) = 8.51, p < .01$)、イベント参加による娯楽 ($t(65) = 9.11, p < .01$)、イベント参加による関係形成 ($t(65) = 9.01, p < .01$) のすべてで有意差がみられた (Figure 1)。ここから、女性同性愛者はイベントに参加することで、新しい価値観に触れ、楽しい時間を過ごしてストレスを解消し、新たな対人関係を形成することが示された。

女性同(両)性愛者友人グループ 女性同性愛者が友人グループとの関わりから、どのような心理的影響をうけているのかを調べるため、女性同(両)性愛者友人グループに関する 15 項目について因子分析を行った。因子負荷量が低い項目及び 2 因子以上に負荷している、3 項目を除外した上で、女性同性愛者友人グループに関する 15 項目について、固有値 1 以上であること及び理論的な背景から 3 因子を抽出し、主因子法、Promax 回転による因子分析を再度試みた。

Table 3 イベント参加に関する因子分析結果

項目	Factor1	Factor2	Factor3	α 係数
「イベント参加による価値観変化」因子				
生き方について新しい考え方に触れられる	0.938	-0.070	-0.048	0.778
恋愛観について新しい考え方に触れられる	0.752	0.072	0.097	
同(両)性愛に対する偏見がなくなる	0.471	0.232	0.006	
「イベント参加による娯楽」因子				
ストレスの解消になる	0.097	0.780	-0.099	0.756
日常生活が楽しくなる	0.016	0.758	-0.001	
「イベント参加による関係形成」因子				
同(両)性愛者の恋人ができる	0.076	-0.285	0.782	0.673
同(両)性愛の悩みを共有できる	0.029	0.207	0.588	
同(両)性愛者の新しい友人ができる	-0.131	0.343	0.511	

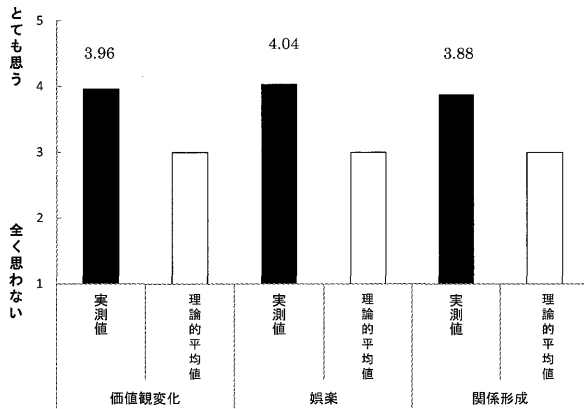


Figure 1 イベント参加の影響

その結果、3因子構造12項目となった。第1因子は「同(両)性愛の悩みを共有できる」や「同(両)性愛の悩みに対しアドバイスを貰える」といった項目から構成されていたため“友人グループによる関係発展”因子と命名した。第2因子は「自分に自信が持てるようになる」や「社交的な性格になれる」といった項目から構成されていたため“友人グループによる価値観肯定的変化”因子と命名した。第3因子は「日常生活が楽しくなる」や「ストレスの解消になる」といった項目から構成されていたため“友人グループによる日常満足”因子とした。因子ごとに α 係数を算出し、ある程度の信頼性を確認できたため、各因子に負荷した項目の平均値を算出して、続く分析に用いた。各因子の項目や項目ごとの因子負荷量、信頼性係数についてはTable 4に示した。友人グループとの関わりの心理的影響を検討するため、因子ごとに理論的平均値の3を上回るかについて、1サンプルの t 検定を実施した。その結果、友人グループによる関係発展 ($t(65) = 11.65, p < .01$)、友人グループによる価値観の肯定的変化 ($t(65) = 5.73, p < .01$)、友人グループによる日常満足 ($t(65) = 9.40, p < .01$) のすべてで有意差がみられた (Figure 2)。ここから、女性同性愛者は

Table 4 友人グループ参加に関する因子分析結果

項目	Factor1	Factor2	Factor3	α 係数
「友人グループによる関係発展」因子				
同性愛の悩みを共有できる	0.842	-0.059	-0.149	0.774
同性愛の悩みに対しアドバイスを貰える	0.755	0.002	0.066	
同性愛者の友人に会える	0.635	-0.048	0.075	
同性愛者の恋人ができる	0.600	0.100	-0.171	
同性愛者の新しい友人ができる	0.536	-0.059	0.155	
「友人グループによる価値観肯定的変化」因子				
自分に自信が持てるようになる	0.009	0.828	0.145	0.726
同性愛者はマイノリティだと実感する	0.062	0.612	-0.407	
社交的な性格になれる	0.087	0.565	0.198	
生き方について新しい考え方に触れられる	-0.066	0.534	-0.089	
同性愛に対する偏見がなくなる	-0.069	0.529	0.079	
「友人グループによる日常満足」因子				
日常生活が楽しくなる	-0.012	-0.027	0.976	0.610
ストレスの解消になる	0.137	0.011	0.713	
友人グループは閉鎖的である	0.103	0.033	-0.359	

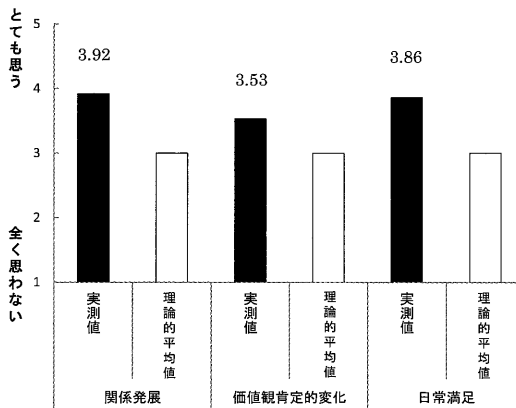


Figure 2 友人グループの影響

友人グループとの関わりによって、関係を維持・発展させ、価値観を肯定的に変化させ、日常生活に満足感をもつことが示された。

精神健康尺度・自尊感情尺度・外向性尺度 各尺度の信頼性係数は概ね高い値を示していたため、各項目の評定尺度値の平均を各尺度の得点とした。また各尺度の項目例や得点の標準偏差についても Table 5 に示した。

各因子と精神健康得点・自尊心の相関 イベント参加の心理的意味 3 因子、友人グループ参加の心理的意味 3 因子、精神健康得点、自尊心得点のそれぞれの相関分析を行った。その結果、“友人グループの日常満足” 因子と精神健康得点の間に有意な負の相関が認められた ($r = -.31, p < .05$)。また、“イベント参加による関係形成” 因子と自尊心得点の間に有意な正の相関関係 ($r = .26, p < .05$) が、“友人グループによる日常満足” 因子と自尊心得点の間に有意な正の相関関係 ($r = .27, p < .05$) が認められた。その他の因子と自尊心・精神的健康との間に有意な相関は認められなかった。友人グループとの付き合いでストレスを解消して日常生活に満足している者ほど、精神健康状態が良いという結果が明らかとなった。そして、イベントに参加して女性同(両)性愛者同士のネットワークを形成するほど、もしくは友人グループとの関わりで

Table 5 各尺度の項目例と基礎統計量

尺度名	項目例	平均 (標準偏差)	α 係数
精神健康尺度	何かをする時いつもより集中して	2.28 (0.49)	0.82
	心配があってよく眠れないようなことは		
	いつもより自分のしている事に生きがいを感じることは		
自尊感情尺度	少なくとも人並みには、価値のある人間である	3.18 (0.76)	0.85
	いろいろな良い資質をもっている		
	敗北者だと思うことがよくある*		
外向性尺度 (BigFive)	話し好き	4.62 (1.91)	0.92
	無口な*		
	陽気な		

*逆転項目

日常の満足感を得るほど、自尊心が高いという結果が明らかとなった。

年齢グループごとに見る各因子と精神健康得点の相関 10代の低年齢グループ、20代の中年齢グループ、30～50代の高年齢グループの3グループに分け、グループごとにイベント参加の心理的意味3因子・友人グループ参加の心理的意味3因子と精神健康得点の関連性について相関分析を行った。年齢による3グループは以下のとおりであった。低年齢グループは15～19歳までの12名、平均年齢17.8歳 ($SD=1.2$)、調査対象者全体に占める割合は18.2%であった。中年齢グループは20～29歳までの42名、平均年齢23.7歳 ($SD=2.6$)、全体に占める割合は63.6%であった。高年齢グループは30～53歳までの12名、平均年齢38.2歳 ($SD=8.6$)、全体に占める割合は18.2%であった。相関分析の結果、低年齢グループにおいて“イベント参加による価値観変化”因子と精神健康得点の間に有意な、比較的高い負の相関が認められた ($r = -.63, p < .05$)。中年齢グループでは“イベント参加による価値観変化”因子と精神健康得点の間には有意な相関は認められなかった ($r = .06, n.s.$)。高年齢グループでも“イベント参加による価値観変化”因子と精神健康得点の間には有意な相関は認められなかった ($r = -.12, n.s.$)。15歳から19歳までの低年齢グループにおいてのみ、イベント参加をすることで価値観変化をおこす者ほど精神健康状態がよいという傾向が見られた。

外向性とイベント参加度・友人グループ参加度の相関 研究1のAさんの語りより、外向的な人がイベントや友人グループに参加している可能性を考慮し、外向性とイベント参加度、友人グループ参加度の相関分析を行った。その結果、外向性とイベント参加度の間には比較的高い正の相関関係 ($r = .47, p < .01$) が、外向性と友人グループ参加度の間には低い正の相関関係 ($r = .32, p < .01$)、いずれも有意な正の相関関係が認められた。外向性の高い人ほどイベント・友人グループ共に積極的に参加していることが明らかとなった。

3-4. 考察

本研究の目的は、女性同(両)性愛者のコミュニティ参加が精神的健康と自尊心に及ぼす影響を調査することであった。

女性同(両)性愛者コミュニティは女性(両)同性愛者向けのクラブイベントやバーなどの比較的大規模かつ一時的な集団と、女性同(両)性愛者同士の3人以上の友人グループという小規模かつ中長期的集団に分け、各コミュニティ参加の心理的意味、それらが精神的健康と自尊心に及ぼす影響を検討するための質問紙を作成した。関西レインボーパレード2012の女性参加者に質問紙調査を実施した。

女性同(両)性愛者は、クラブイベントやバーに参加することによって、他の女性同(両)性愛者の生き方や恋愛について新しい考え方に触れる“価値観変化”、ストレスの解消としての“娯楽”、友人や恋人作りなどの“関係形成”、などの心理的影響を受けていることが示された。また、女性同(両)性愛者は友人グループとの関わりによって、友人・恋人作りに加えて悩みの共有やアドバイスを得る“関係発展”、生き方について新しい考え方に触れ、自分に自信が持てるようになるなどの“価値観の肯定的変化”、日常が楽しくなるなどの“日常満足”などの心理的影響を受けていることが示唆された。いずれの因子も3.5以上の高い平均値を有しており、女性同(両)性愛者は、これらのコミュニティ参加の意味を非常に重要視していた。女性同(両)性愛者は、日常生活において、自分以外の女性同(両)性愛者を見つけることが困難な状況にあるために、イベントやバーに参加して友人・恋人を作り、そこから友人グループを形成することで、女性同(両)性愛者コミュニティを形成・維持していく過程が示唆された。

精神的健康へ影響を及ぼすもの 女性同(両)性愛者同士の友人グループによる“日常満足”が精神健康状態に良い影響を与えることが明らかとなった。一般に人は、様々な場面における役割を持つことで精神健康状態に良い影響を受ける。女性同(両)性愛者においても同様のことが言えるが、日常生活場面でマイノリティとして生きざるを得ない女性同(両)性愛者では、自らの性的指向を

抑圧する必要のない友人グループとの関わりの中で、効果的に精神健康状態を向上させるのではないだろうか。また、精神健康状態は低年齢グループ（15～19歳）において、イベント参加による価値観変化と有意な高い負の相関が認められた。これは中年齢グループ（20～29歳）、高年齢グループ（30～53歳）においては見られなかったものである。「自分は同(両)性愛者かもしれない」と気づき、性的指向の自覚に対する葛藤、アイデンティティの確立などに該当する10代の思春期においてのみ、イベントなどにおいて他の女性同(両)性愛者と接することで新しい恋愛観や生き方について学び、そのことが精神的健康にポジティブな影響を与えることが示唆された。石丸（2001）の「同性愛アイデンティティ」の②同性愛と異性愛のどちらに価値を置くか混乱し揺れ動く時期から③同性愛・異性愛ともに安定した価値付けができ同性愛が自己にうまく統合された時期に至るために、他のLGBと交流を図ることで、知識や理解を深めるという方法は思春期において特に有効なものであると考えられる。

自尊心へ影響を及ぼすもの 女性同(両)性愛者向けのクラブイベントやバーに参加することによる“関係形成”、及び女性同(両)性愛者の友人グループによる“日常満足”が自尊心に良い影響を与えることが明らかとなった。同(両)性愛者はその不可視性により、日常生活において同じ同(両)性愛者を見つけることが困難である。しかしイベント場面ではそこにいる全員が同(両)性愛者であり、自らの性的指向をわざわざ明示することなく、友人作りや恋人作りを行える。こうした“仲間作り”が「自分と同じような人はたくさんいるんだ」という意識に繋がり、女性同(両)性愛者の自尊心を向上させるものと考えられる。

4. 総合的考察

本研究では、女性同(両)性愛者コミュニティをイベントと友人グループの二つに分け、それぞれのコミュニティに参加する心理的意味、それらが精神的健康と自尊心に及ぼす影響に着目して調査した。

研究1では面接法による質的研究を行い、女性同(両)性愛者の抱える問題と

コミュニティ参加について、当事者自身がどう捉えているかを調査した。その結果、同(両)性愛者全般を対象とした先行研究と同じく、性的指向の気づきと葛藤は思春期に起こっていた。その揺れ動く時期に、“普通の恋愛”をしようと異性との交際・性交渉を試みるなどの体験を経た上で、性的指向を確立させていた。その後、他者へのカミングアウトを試みるが、その対象として第一に多いのは友人であり、カミングアウト対象者の肯定的な反応がその後のカミングアウトの遂行を左右する事が明らかとなった。そればかりでなく、この初めてのカミングアウトが思春期に集中することから、女性同(両)性愛者のアイデンティティ確立・自尊心の維持にも多大な影響を及ぼす可能性が示唆された。また女性同(両)性愛者向けのイベント場面では参加度や満足度に対し外向性という性格特性が大きく影響することが示唆された。こうしたコミュニティでは、カミングアウトをすることなく「お互い同(両)性愛者である」との認識の下、関係形成をスタートすることができる。しかし、その際、自身の性的指向を肯定的に捉え、一定以上の自尊心を有していないと、イベントに参加すること自体が困難である側面も見られた。

研究2では、研究1で得られたコミュニティ参加に関する語りから心理的意味を精査し、質問紙法による量的研究を行い、精神的健康と自尊心、および外向性との関連を調査した。その結果、イベントやバーへの参加については“価値観変化”、“娯楽”、“関係形成”、友人グループへの参加については“価値観肯定的変化”、“日常満足”、“関係発展”のそれぞれ3つの心理的意味があることが明らかとなった。そして友人グループの“娯楽”と精神的健康、イベント参加の“関係形成”、友人グループの“日常満足”と自尊心の間に相関が見られた。また10代の調査対象者のみ、イベント参加からの“価値観変化”と精神的健康の間に相関が見られた。

10代の女性同(両)性愛者において、同(両)性愛コミュニティ参加による価値観変化によって精神的健康に良い影響を及ぼすことは、同じ年代の男性同(両)性愛者においても同じ状況が想定される。このことは、今後の同(両)性愛者支援の大きな手がかりとなり得よう。思春期の若者が自身の性的指向に悩み・葛

藤した際には、同じ性的指向を持つ者との関わりの機会を持つことが重要になる。この世代の若者に対する学校教育現場でも、より多様な性のあり方についての教育は、同(両)性愛者当事者と、それを取り巻く周囲の者の両方に対して、価値観の変化と精神的健康、さらに、そこで営まれる対人関係という観点から、ポジティブな影響を与えるものと思われる。

最後に本研究の問題点と今後の展望を述べる。同性愛アイデンティティの理論的予測に基づいた、コミュニティ参加が自尊心に及ぼす影響を本研究では十分述べるができなかった。これについてはサンプルの偏りの問題が考えられる。本研究では、パレードという屋外において大規模で参加者の気持ちを高揚させるイベントの参加者を調査対象とした。パレードは昼間に大阪御堂筋を同(両)性愛者（もしくは支援者）であると明示して歩くものである。そのため、パレードに参加すること自体が、同(両)性愛アイデンティティを確立していなければできない可能性が考えられる。そのため、今後の同(両)性愛アイデンティティ発達過程についての定量的測定は、本研究のように横断的研究ではなく、より発達の視点を加味した縦断的研究を重ねていく必要があるだろう。これにより、同(両)性愛アイデンティティの発達過程を検証することが可能となる。加えて、同(両)性愛者コミュニティへの参加が自尊心・精神的健康に及ぼす影響の因果関係について、より精緻に検証できると考えられる。また、低年齢グループではコミュニティ参加の影響がみられたことから、同(両)性愛アイデンティティが確立される思春期を対象にした研究も必要であると考ええる。性的マイノリティの問題を扱う研究は母集団の規模が正確にわからないことや不可視的マイノリティであることから、その方法の難しさが度々論じられるが、低年齢の対象者に対してはインターネットを用いた意識調査を利用することが非常に有効であると考えられる。

引用文献

Crocker, J., & Major, B. (1989). Social stigma and self-esteem: the self-protective properties of stigma. *Psychological Review*, 96, 608-630.

- D'Augelli, A. R., & Hershberger, S. L. (1993). Lesbian, gay, and bisexual youth in community settings: Personal challenges and mental health problems. *American Journal of Community Psychology*, 21, 421-447.
- Goldberg, D. P., (1972). The detection of psychiatric illness by questionnaire. A technique for the identification and assessment of non-psychotic psychiatric illness. *Maudsley Monograph 21. Oxford University Press, London.*
- Herek, G. M., & Capitanio, J. P. (1996). "Some of my best friends": Intergroup contact, concealable stigma, and heterosexuals' attitudes toward gay men and lesbians. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 22, 412-424.
- 日高庸晴 (2000). ゲイ・バイセクシュアル男性の異性愛者的役割葛藤と精神的健康に関する研究 思春期学, 18, 264-272.
- 日高庸晴・市川誠一・木原正博 (2004). ゲイ・バイセクシュアル男性の HIV 感染リスク行動と精神的健康およびライフイベントに関する研究 日本エイズ学会誌, 6, 165-173.
- 石井香里 (2009). 女性同性愛者が抱える生活上の問題に対する当事者の姿勢—同性パートナーと同居する女性のインタビュー調査から— 神戸大学大学院人間発達環境学研究所研究紀要, 3, 65-76.
- 石丸径一郎 (2001). マイノリティ・グループ・アイデンティティー人はいかにして自らに付与された差異を取り扱うか— 東京大学大学院教育学研究科紀要, 41, 283-290.
- Isimaru, K. (2002). Everyday experiences and self-esteem of Japanese lesbian, gay, and bisexual people: *an approach by diary method. paper presented at the 7th Asian congress of sexology.*
- 石丸径一郎 (2004). 性的マイノリティにおける自尊心維持—他者からの受容感という観点から— 心理学研究, 75, 191-198.
- 桐原奈津・坂西友秀 (2003). セクシャル・マイノリティとカミング・アウト 埼玉大学紀要教育学部 (教育科学), 52, 121-141.
- Mackay, J., (2000). *The penguin atlas of human sexual behavior.* London: Penguin.
- 中杉泰彬 (1981). 質問紙法による精神・神経症状の把握の理論と臨床的応用 国立精神衛生研究所.
- Rosenberg, M., (1965). Society and the adolescent self-image. *Princeton Univ. Press.*
- 杉浦郁子 (2009). 異性愛主義の中の女性の同性愛的欲望 好井裕明(編) 有斐閣選書, 121-139.
- 和田さゆり (1996). 性格特性用語を用いた Big Five 尺度の作成 心理学研究, 67, 61-67.

山本真理子・松井 豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.

謝辞

本研究の着想にあたり、ご指導を頂いた広島大学教授 森永康子先生と宝塚大学准教授 日高庸晴先生に深謝する。本論文の執筆にあたり、丁寧かつ熱心にご指導いただいた神戸女学院大学専任講師 木村昌紀先生と、数々のご助言をいただいた、神戸女学院大学准教授 三浦欽也先生、及び審査員の先生方に感謝する。また、質問紙の配布と回収にご協力頂いた、河野伊代さんに謝意を表す。